

3-39「第三九章 差額地代の第一形態」

この「章」では、それぞれ豊度の違っている同面積の土地に投下された等量の諸資本の生産性の相違の結果としての差額地代を考察する。

「第三九章」の抜粋

「二つの等量の資本および労働が等面積の土地で用いられて不等な結果を生む場合には、（その超過利潤は、——青山）地代に転化するのである。……いつ、どのようにして、どんな事情のもとで、この転化が行なわれるかということが、どの場合にも考究されなければならないのである。」（P837-838）

「資本主義的生産様式による農業の占領、自営農民の賃金労働者への転化は、事実上この生産様式一般が行なう最後の征服なのだから、これらの不等（租税の賦課や農業の発展度や資本配分等が均等でないこと——青山）は農業では他のどの産業部面でもよりも大きいのである。」（P838）（だから、等量の資本および労働が等面積の土地で用いられた場合、一層不等な結果を生む——青山）

「そこで、まず第一に、同じ面積のいろいろな土地に充用される等量の資本から生まれる不等な結果を考察しよう。または、面積が同じでない場合には、同じ大きさの面積について計算した結果を考察しよう。」（P838）

〈同じ面積のいろいろな土地に充用される等量の資本から生まれる不等な結果〉の考察について

「差額地代の条件はただ土地種類の不等性だけである。」（P851）

「これ（優等地の生産価格よりも市場価格が高いということ——青山）は、資本主義的生産様式の基礎の上で競争の媒介によって実現される市場価値による規定である。この規定は、（地代という——青山）ある虚偽の社会的価値を生み出す。これは、土地生産物が従わされる市場価値の法則から生ずる。……この行為は必然的に生産物の交換価値にもとづくもので、土地やその豊度の相違にもとづくものではない。社会の資本主義的形態が廃止されて社会が意識的な計画的な結合体として組織されているものと考えてみれば、……社会はこの土地生産物を、それに含まれている現実の労働時間の二倍半で買い取りはしないであろう。したがってまた土地所有者という階級の基礎はなくなってしまうであろう。それは、外国からの輸入によって生産物が同じ金額だけ安くなるのとまったく同じに作用するであろう。それだから、——現在の生産様式は維持されるとするが、差額地代は国家のものになると前提して——他の諸事情が変わらなければ土地生産物の価格は同じままであろう、と言うのは正しいとしても、結合体が資本主義的生産にとって代わっても生産物の価値は同じままであろう、と言うのはまちがいである。同じ種類の諸商品の市場価格は同じだということは、資本主義的生産様式の基礎の上で、また一般に個々人のあいだの商品交換にもとづく生産の基礎の上で、価値の社会的な性格が貫かれる仕方である。消費者として見た社会が土地生産物のために過多に支払うもの、それは土地生産での社会の労働時間の実現のマイナスをなすのであるが、それが今では社会の一部分にとっての、土地所有者にとっての、プラスをなすのである。」（P852-853）

〈面積が同じでない場合の、同じ大きさの面積について計算した結果〉の考察について

「拡張が優等地で行なわれるのに比例して、つまり生産物量が土地の拡張に比例してふえるだけではなくそれよりももっと急速にふえるのに比例して、穀物地代も貨幣地代もふえ

て行く。」(P856)

「総面積のなかで優等地が占める割合が大きければ大きいほど、等額の投資によって等面積の土地で得られる生産物量はそれだけ大きいからであり、また一エーカー当たりの平均地代もそれだけ大きいからである。」(P860)※日本農業を考えるうえで重要。

「とにかく、次のことは明らかであり、またそれがわれわれの研究の進行にとっては重要なのである。……一エーカー当たり平均地代の相対的な高さも、平均地代率または土地に投下された総資本にたいする地代総額の割合も、耕作の単なる(各土地部類での不均等な——青山)外延的拡大によって増加または減少することがありうるということである。」(P861)

差額地代Ⅰのところ考察した形態に関連する補足

「**第一に。**」「土地の価格は、たしかに、地代が資本還元されたものにほかならない。……未耕地の価格は、その土地の地代——その合計式を価格は表している——と同様に、その土地が現実に使用されないかぎり、純粹に幻想的である。……(未耕地の価格は——青山)ただ既耕地での投資とその成果との反射でしかないのである。……土地投機、たとえば合衆国に見られるそれは、ただ、このような、資本と労働とが未耕地に投ずる反射にもとづいているだけである。」(P862)

「**第二に。**」「耕作地の拡張の進行は、一般に、より劣等な土地のほうに向かって行なわれるか、またはいろいろな与えられた土地種類の上で、それらのあり方にしたがって、いろいろに違った割合で行なわれる。」(P862)理由は、「価格騰貴」と「位置」による。

「**第三に。**」「穀物をより安く輸出することのできる植民地や一般に若い国々では、それだからまた必然的にその土地の自然的豊度がより高いのだということは、まちがった前提である。穀物はここではその価値よりも安く売られるだけでなく、その生産価格よりも安く、すなわちより古い国々での平均利潤率によって規定されている生産価格よりも安く、売られるのである。」

「即時利用可能度のほうは天然の沃地でよりも天然の痩せ地でのほうが大きいということもありうる。そして、この種の土地こそは、植民地移住民がまず手をつけるであろう土地であり、また、資本が乏しい場合にはまず手をつけなければならない土地なのである。」(P866)

「**最後に。**」「たとえ平均価格の高さが生産にたいして阻害的な作用もしないし促進的な作用もしない場合でも、農業では(資本主義的に経営されるすべての他の生産部門でと同様に)絶えずあの相対的な過剰生産が生ずるのである。……需要は絶えず増大する。そして、これを予想して絶えず新たな資本が新たな土地に投下される。」(P867)

「第三九章」の概略

二つの等量の資本および労働が等面積の土地で用いられて不等な結果を生む場合に、その超過利潤は、地代に転化する。資本主義的生産様式による農業の占領、自営農民の賃金労働者への転化は、事実上この生産様式一般が行なう最後の征服なので、これまでの租税の賦課や農業の発展度や資本配分等が均等でないことは、他のどの産業部面でもよりも大きく、等量の資本および労働が等面積の土地で用いられた場合の不等な結果は一層を大きくする。

以下で、「同じ面積のいろいろな土地に充用される等量の資本から生まれる不平等な結果」と「面積が同じでない場合」の「同じ大きさの面積について計算した結果」についての考察をおこなう。

〈同じ面積のいろいろな土地に充用される等量の資本から生まれる不平等な結果〉の考察の中で述べられていること

「差額地代の条件はただ土地種類の不等性だけである。」(P851)

土地生産物が従わされる、生産物の交換価値にもとづく市場価値の法則は、地代という虚偽の社会的価値を生み出す。だから、社会の資本主義的形態が廃止されて「意識的な計画的な結合体として組織されている」社会では、「土地所有者という階級の基礎はなくなってしまう」だろう。「それは、外国からの輸入によって生産物が同じ金額だけ安くなるのとまったく同じに作用するであろう。」「同じ種類の諸商品の市場価格は同じだということは、資本主義的生産様式の基礎の上で、また一般に個々人のあいだの商品交換にもとづく生産の基礎の上で、価値の社会的な性格が貫かれる仕方である。消費者として見た社会が土地生産物のために過多に支払うもの、それは土地生産での社会の労働時間の実現のマイナスをなすのであるが、それが今では社会の一部にとっての、土地所有者にとっての、プラスをなすのである。」(P852-853)

〈面積が同じでない場合の、同じ大きさの面積について計算した結果〉の考察の中で述べられていること

「総面積のなかで優等地が占める割合が大きければ大きいほど、等額の投資によって等面積の土地で得られる生産物量はそれだけ大きく、**「拡張が優等地で行なわれるのに比例して、つまり生産物量が土地の拡張に比例してふえるだけではなくそれよりももっと急速にふえるのに比例して、穀物地代も貨幣地代もふえて行く。」※これは、日本農業を考えるうえで重要。**

「一エーカー当たり平均地代の相対的な高さも、平均地代率または土地に投下された総資本にたいする地代総額の割合も、」各土地部類での不均等な「耕作の単なる外延的拡大によって増加または減少することがありうるということ」は「明らかであり、またそれがわれわれの研究の進行にとっては重要なのである。」

差額地代 | のところで考察した形態に関連する補足について

「**第一に**」、「土地の価格は、たしかに、地代が資本還元されたものにほかならない」から、未耕地の価格は、「純粋に幻想的である。」「土地投機」は、「このような、資本と労働とが未耕地に投ずる反射にもとづいているだけである。」

「**第二に**」、「耕作地の拡張の進行は、一般に、より劣等な土地のほうに向かって行なわれるか、またはいろいろな与えられた土地種類の上で、それらのあり方にしたがって、いろいろに違った割合で行なわれる。」

「**第三に**」、「穀物をより安く輸出することのできる植民地や一般に若い国々では、それだからまた必然的にその土地の自然的豊度がより高いのだということは、まちがった前提である。」「即時利用可能度のほうは天然の沃地でよりも天然の痩せ地でのほうが大きいということもありうる。そして、この種の土地こそは、植民地移住民がまず手をつけるであろう土地であり、また、資本が乏しい場合にはまず手をつけなければならない土地なのである。」(P866)

「最後に」、「たとえ平均価格の高さが生産にたいして阻害的な作用もしないし促進的な作用もしない場合でも、農業では(資本主義的に経営されるすべての他の生産部門でと同様に)絶えずあの相対的な過剰生産が生ずるのである。……需要は絶えず増大する。そして、これを予想して絶えず新たな資本が新たな土地に投下される。」(P867)

「第三九章」の要約と現代の私たちが留意すべき点

「第三九章」の要約

二つの等量の資本および労働が等面積の土地で用いられて不等な結果を生む場合に、その超過利潤は、地代に転化する。資本主義的生産様式による農業の占領、自営農民の賃金労働者への転化は、事実上この生産様式一般が行なう最後の征服なので、より一層不等な結果を生む。

この「章」では、「同じ面積のいろいろな土地に充用される等量の資本から生まれる不等な結果」と「面積が同じでない場合」の「同じ大きさの面積について計算した結果」について考察する。

地代は、生産物の交換価値にもとづく市場価値の法則によって生みだされる「虚偽の社会的価値」である。だから、社会の資本主義的形態が廃止され、「意識的な計画的な結合体として組織されている」社会では、土地所有者という階級の基礎はなくなってしまう。消費者として見た社会が土地生産物のために過多に支払うもの、それは土地生産での社会の労働時間の実現のマイナスをなすのであるが、それが今では社会の一部にとっての、土地所有者にとっての、プラスをなすのである。

総面積のなかで優等地が占める割合が大きければ大きいほど、等額の投資によって等面積の土地で得られる生産物量はそれだけ大きく、拡張が優等地で行なわれるのに比例して生産物量がふえるだけではなく、それよりももっと急速に穀物地代も貨幣地代もふえて行く。」※これは、日本農業を考えるうえで重要。

各土地部類の不均等な耕作地の外延的拡大によって、単位耕作地当たりの平均地代の相対的な高さも、土地に投下された総資本にたいする地代総額の割合も、増加または減少することがありうる。このことは、われわれの研究の進行にとって重要である。

以上に関連して、四つの補足的論及を行なう。

①土地の価格は、地代が資本還元されたものにほかならないから、未耕地の価格は「純粹に幻想的」である。「土地投機」は、このような、資本と労働とが未耕地に投ずる反射にもとづいている。

②耕作地の拡張の進行は、一般に、より劣等な土地のほうに向かって行なわれるか、またはいろいろな与えられた土地種類の上で、それらのあり方にしたがって、いろいろに違った割合で行なわれる。

③穀物をより安く輸出することのできる植民地や一般に若い国々は、その土地の自然的豊度がより高いのだということは、まちがった前提である。

④たとえ平均価格の高さが生産にたいして阻害的な作用もしないし促進的な作用もしない場合でも、農業では(資本主義的に経営されるすべての他の生産部門でと同様に)絶えずあの相対的な過剰生産が生ずるのである。……需要は絶えず増大する。そして、これを予想して絶えず新たな資本が新たな土地に投下される。

現代の私たちが留意すべき点

まず、「地代」は、二つの等量の資本および労働が等面積の土地で用いられて不等な結果を生む場合の超過利潤であり、資本主義的生産様式のもとの市場経済の結果であり、「虚偽の社会的価値」なので、社会の資本主義的形態が廃止され、「意識的な計画的な結合体として組織されている」社会では、土地所有者という階級の基礎はなくなることに留意して下さい。

そして、農業技術の進歩によって規模の拡大が進み、単位面積の小さいことが劣等地の条件の一つとなるなかで、日本はいかにして優等地の多い諸国とのハンディを埋めるかが日本農業の大きな課題であることを再認識する必要があります。

また、土地の価格は利用の高度化により一般的に上昇傾向があるなかで、「地代が資本還元された」ものとしての「幻想的」な価格をもつ「土地」はかっこの「投機」対象であることも再認識する必要があります。

なお、「穀物をより安く輸出することのできる植民地や一般に若い国々」の記述に関し、それらの国々の労働者にたいする帝国主義な収奪についても留意することを忘れてはなりません。